
学園黙示録～戦車男～

しんかー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録〜戦車男〜

【Nコード】

N1060N

【作者名】

しんかー

【あらすじ】

転生不良青年、河陰^{かわなみ} 染^{せん}が平和島パワーで鯖ります。主要武器はトンファーとか標識とかガードレールとかです……。

#01・憑依と平和島の力（前書き）

原作資料がアニメと二次創作で知った知識しかないので、誤りがあるかもしれませんがそのときはご遠慮なく。

#01・憑依と平和島の力

俺は死んだ。高校では不良やってたが、親父が事故死してから心機一転して勉強に励み、なんとか大学に受かったと思ったら、死んでたんだ。そしたら神と名乗る輩やからが自分の手違いで殺してしまつてとかほざきやがる。ひとしきり痛め付けると、あの野郎はこんなことを言ってきた。

「お前を異世界に転生させてやる。もちろん特典も付けてやるぞ」

正直、ふざけるなって感じだった。俺は再びクソツタレをリンチにかけると、元の世界に戻すことを要求するが――

「それは不可能だ」

――三度目の制裁と復讐の嵐がすぎると、俺はお袋が不自由のない人生を送れるように神に約定を結ばせ、“特典”とやらを与えられて転生することになった。

「最強の力だ、上手く使え」

幸せな人生を送るのに“最強の力”が必要な世界に転生させようっていう思考が理解できないが、どうとでもなれで俺は意識を手放した。

ゆっくりと瞼を開ける。見慣れた白い天井、病院だろう。断続的な電子音が聞こえる、心拍を見るアレだ。クソツタレいわく転生だったはずだが、満身創痍な感じからして赤子とは考えにくい。唯一痺れていない右手を動かしてみると、緩慢ながらちゃんと動く。見てみればそれは小さな少年のものだった。

「クソツタレ……」

転生じゃねえ、なんか憑依したらしい。おおよそ死にかけの肉体に“特典”付きの魂ぶち込んだってところか……。

にしても、二度目の人生最初の言葉がクソツタレとは、つくづくクソツタレだ……。

俺は枕元のナースコールのボタンを押した。

バタバタバタバタ……！

複数の足音が聞こえてくる。医師と看護師か。どうやら俺の覚醒は予期せぬ事態らしいな。

「染くん！」

セン、それが俺の名前らしい。姓か名か分からないが、まあいい。

頭に包帯巻いてるから記憶喪失とでも言えばなんとかなるだろ、危険状態だったみたいだし。

「起きたんだね？ まだ治ってないから、じっとしていようね」

「先生……」

俺は白衣を着た初老の男に問いかけた。

「染って、俺の名前？」

瞬間、男ははっとした表情になって、俺の頭を撫でながら答えた。

「河陰^{かわなみ}染^{せん}。君の名前だよ？ どうやら事故のせいで記憶が混濁しているよう——」

「先生、俺の両親は？」

男が言つのをさえぎって次の質問をぶつける。言ってから少し子どもらしくない口調だったかと心配したが、どうやら気付かれてはいないようだった。

「先生……」

傍らの看護師の女性が辛そうな表情をするが、医師の男は意を決したように口を開いた。

「よく聞いてね、染くん。……君は交通事故にあってね、一緒の車に乗っていた君の両親は……それで命を落としてしまったんだ……」

苦渋の表情を浮かべる二人に対して俺は実に淡泊な気分だった。
まあ、今さら親なんて現われたって、それはそれで困るよな。

俺は顔色一つ変えずに言った。

「そうですか……」

俺は現在十二歳、今日は中学入学の日だ。小学校では勉強のできる不良で通っていた。なにせ俺はガキが嫌いだ。親がいないからつてイジメにきたガキどもは片っ端から締め上げた。いや、投げ飛ばした。発育途上の身体でどうしてこんなに力が出るのかと不思議に思ったが、その答えは簡単だった。

クソツタレの“特典”だ。しかも、まさに“最強”の。

神が取って付けたように俺に与えたのは、“平和島 静雄の特異体質”。あの、最強の男の最強の肉体だ。

自販機を投げ飛ばし、標識を振りかぶり、自動車を蹴り飛ばす。刃物で切り付けても五ミリほどしか傷付かず、注射針は通らない。そんな身体に気付いたのは病院のリハビリでのこと。異常な回復力と強化されていく肉体。試しに一度冷蔵庫を持ち上げてみれば肋骨を損傷し、しかし二度目には持ち上げられるという。俺は前世で力ツアゲなんかして得た金は、たいてい娯楽品にあててたからラノベ

の知識もあつたのだ。

まあ、なんだかんだで小学校では怪我人を量産したわけで、今日からは中学生、いわゆる厨房だ。

そこで入学式前のクラス分けの紙を見てたのだが――

「ハハ、まさかな……」

俺のクラスの出席番号二十八番に“フスジマ 毒島 サエコ 冴子”の文字がある……これはどういうことだ？

『出席番号順に座ってください』

黒板にデカデカと書かれた文字。反抗する理由もないため、自分の番号、十三番の席に荷物を置くと二十八番の席を探す。

「ぶすじま 毒島 さえこ 冴子てなお前か？」

俺は黒のセミロングが凛々しさを際立たせる美少女に話しかけた。普段のクセか、ガンを飛ばすようなやや尊大な目付きに一瞬少女は驚くと、構え直して答えた。

「いかにも私だが、初対面で正しく読んでもらえたのは初めてだよ。

私に何か用か？」

容姿ペケ、口調ペケ、これで剣道経験者ペケならゾンビ天国は免れないだろう。

「仮名はふつてあったし。珍しい苗字だったからな、河陰 染だ」

「そうか。よろしく、カワナミ君」

自己紹介が終わると教員が入ってきて、出席確認の後に体育館に案内された。

「入学早々上級生を殴り飛ばす奴があるか！」

「サーセン」

翌日、俺が入った教室は戦々恐々としていた。なんでも、学校一の不良と呼ばれるグループが新入生にボコボコにされたらしい。し

かもその犯人が内のクラスにいるとか。

俺っスね、サーセン。

廊下を我が物顔で歩くあいづらがどうにも気に入らなくて、ぶっ飛ばしてしまった。反省も後悔もしていない。悪即斬だ。

黙って席に着くと、二十八番の席から美少女がこっちにやってきた。周りの生徒たちが怖いもの知らずを見るような目で彼女を見つめる。

「河陰君、噂のことなんだが……」

早速来やがったよ。教室の後ろに立て掛けてある竹刀の袋が見たなくて、俺は机に突っ伏しながら返した。

「冴子か。スゲエよな、噂なのに事実と一寸のズレもない」

「“飛んだ”というやつか？」

「他に何がある？」

そう、文字通り奴らは飛んだ、目測七メートルほどの距離を。俺は冴子の方を向き、ニヤリと笑って見せる。

「お前本当に人間か？」

「違うと言ったら？」

「納得する」

「……そうかい。まあどちらにせよ、俺は河陰 染だ。それに変わりはない」

そう返したところでチャイムが鳴る。冴子が席に戻るのを見届けると、昨日みた教員が入ってきた。ホームルームが終わって、教員が帰ろうとドアの方に向いたとき、それは勢いよく開いた。

ダアンツ！

「オラ河陰、ちょっと来いや！」

「あん？」

朝から元気なこつて……。厨房がいくら束になってかかったって意味ねーのになあ。俺は冴子他クラスメイトの制止を振り切ってドアまで歩くと、パシリ野郎を躊躇なく殴り飛ばした。廊下を十メートルほど飛んでいき気絶した男の顔に唾を吐くと、俺はグラウンドに向かう。さっきからガヤガヤとうるさいのだ。

冴子がポカンとしながら見ているのを感じながら、俺は後ろ手に手を振った。

#02・剣の信頼

「君は馬鹿なのか？」

俺こと河陰染^{かわなみせん}はただ今入院中だ。全身に打撲傷やら裂傷やらがあり、右手首は折れていた。先の喧嘩での貰いものだ。ちなみに相手の不良連中は全員逃がさず気絶させ、利き手の小指を砕いておいた。これではらくは戦えまい。

と、目の前の剣道部の美少女はなぜここにいるのだろうか。

「なんで来た？」

「君が私に最初に話しかけてきた友人だからだろう」

「下手すると不良どもに目エ付けられんぞ」

部活帰りなのか、竹刀を携^{たずね}えている姿が五年後のゾンビカーニバルを予言しているようで頭痛がする。もはや疑いの余地なく、ここは“学園黙示録”の世界なのだろう。

「それもそうだが、誰も来ないと寂しいだろう。どうだ、林檎くらいなら剥いてやるぞ」

「お前は俺の彼女が何か？　つか寂しくねーし」

「寂しい奴は皆そう言う」

ビキツと俺の額に青筋が走る。俺は冴子の手から赤い林檎をかつさらうと、それにかじり付いた。男の子だと微笑んだ冴子を睨み付けて追い帰すと、彼女は花瓶に水仙の花を生けて去っていった。こいつ俺に死ねとでも言いたいのか……？

「皆そう言う……か」

ベッドに寝そべり、俺は眠りについた。

「おうらああああ！」

高速で振り回される道路標識が不良たちを薙ぎ払う。断絶と再生を繰り返し“進化”していった俺の身体は、一年もたつ頃にはお馴染みの標識を扱えるほどになっていた。

日に日に増える敵をねじ伏せながら授業を受ける日々。なぜサボろうとしないのか自分でも不思議に思う。朝起きたら待ち伏せしていたアホどもを締め、昼休みには呼び出しをかけてきたバカどもを締め、帰りにゲーセンに寄れば報復に来たクソどもを締める。俺は俺なりの日常を送っていた。

実のところ、学園黙示録についてはそれほど詳しくない。面白い作品の内の一つくらいにしか思っただけだったから。

はっきり言って後四年でゾンビがやってくるってことくらいしか、俺は把握していなかった。

そんなとき、事件が起こった。

いつもなら簡単な挨拶くらいは普通に交わすはずの冴子が、ある日から急に何も話さなくなったのだ。最初は大会が近いのかと思っただが、よくよく考えてみると中二は確か例の返り討ち事件のある年だった。

この頃張り詰めた雰囲気なのはそのせいかと納得して、俺は友人のよしみで一肌脱いでやることにした。

「サアアエエコオオオオ！」

というわけで俺は剣道部の練習中、トンファー片手に突撃したのだった。

その場にいた全員の視線が俺に集中し、それにさらに不機嫌になった俺は海外から輸入したトンファーを持ち直して飛び掛かった。

まさに噛み殺さんと振り落とされた超合金製の棒が、受け止めた竹刀を軽々へし折る。某復活の風紀委員長とは違って右手に一本だ。左手用もあるが、今は必要ない。

冴子は驚いて数歩下がると、部員から木刀を受け取った。拍子で頭に巻いたタオルがほどけて落ちる。絹のような黒髪が舞った。

「いきなり何だ、河陰君！」

「おい冴子、最近何かあったろ……… ったく一人でウジウジ考え込みやがって」

「な、何のことだ………！」

声が若干上ずっている。明らかに動揺していた。

俺は再度殴りかかり、木刀と打ち合う。

「手前エを一辺ぶちのめすっつー話だ」

「何を………！」

木刀を力任せに振り払うと、一歩踏み込んでトンファーを肩に振り落とす。流れるような太刀筋で受け流され、両手で突きを放ってきた。中二にしては速い。首をひねることで紙一重で躲すと、冴子の手と俺の首を支点として木刀をトンファーの短い方で殴り付ける。

ミシッと木材の繊維質が悲鳴を上げ、槌子の原理により木刀を半ばで真つ二つに折り碎いた。鬼気迫る表情が信じられないとも言

いたげな色に急変し、俺はその隙を突いて冴子の胴着を引つ掴んで投げ倒した。

「ぐっ！」

ズバンッ！

直後銃声にも似た破碎音が、冴子の頭の横数センチで鳴り響く。冴子はその音で敗北を悟ったようで、以外と近い距離にあった俺の顔をまっすぐ見つめていた。

破碎音は俺のトンファーが床を突き破った音だった。衝角の長い方が深々と刺さっている。俺は胴着からゆっくり左手を放すと、その手で冴子の髪を触った。

耳元に口を近付けてささやく。普段の俺からは想像もつかないような穏やかな口調だった。

「……冴子、お前は正常だ、すぎるくらいに。人つてのは力を手に入れるとそれを振りかざしたくなるもんなんだよ、俺みたいにな……」

「河陰君……どうして」

なぜ知っているのかって感じた。もちろん本当のことは言えないが、そうでなくても分かっってしまうくらいに――

「――目が、喧嘩するときの俺に似てたからな」

嘘じゃない。さっきまでの冴子の目は、人を傷付ける覚悟をした目だった。俺と同じ、傷付けてもよいと判断した相手を叩き潰すこ

との満足感から来る目だ。

「そうか……プロの目は誤魔化せないな……」

「……もう一度言うが、お前は正常だぜ、冴子。根源的に破壊欲や支配欲みたいなのを持ってるのが人間だ。気に病むことなんてねーんだよ」

それでも——と冴子は納得できないように弱々しく反論する。俺は顔を上げ、不安に染まった二つの目を見据えて言った。

「それでも受け入れられないんなら、俺がまた叩きのめしてやるよ。何度だってな」

「河陰君……」

「……染^{せん}でいい」

言いながら、トンファーを引き抜き身体を起こす。指から抜けていく綺麗な髪を少し惜しく感じたが、瞬時に頭から邪念を消し去ると立ち上がって歩き出す。

「そうか……ありがとう、染」

背中で聞いた声に答えることなく、俺はそのまま剣道部を後にした。

冴子の傍に、入部届けを残して。

河陰染は変わった存在だ。特異体質や卓越した戦闘能力を除いても。

彼は入学当初から、他の生徒とは一線を画していた。それは私自身の印象からも、大衆的な見方からも言えることで、入学式に不良グループをボコボコにし、その翌日には学内の不良ほぼ全員を病院送りにした。

その行動は支離滅裂で予測がつかず、子どものように我を通すこともあれば、時に誰よりも大人っぽくなるという、まったく不可解な人物だ。

だがそれ故に私は助けられた。

一年前、私は強姦魔に会い、それを散々に痛め付けた。正当防衛を盾に、私はその行為に満足感を得ていた。同時に、自分が自分ではないような気がして、その性癖に恐怖した。だが、それは束の間。染は私を圧倒し、私の恐怖を意味のないものと説いた。最初は納得できなかったが、今なら分かる。

私は自惚れていたんだ。

自分のことをさも化け物のように見ていた。自分より弱い者たちを基準として。私はただ、戦いを、勝利を求めているにすぎなかった。試合における勝利ではなく、戦いの本当の勝利が欲しかったの

だ。

染が剣道部に入部してから、私たちはたびたび“戦って”きた。あいつは無駄に頑丈だから、遠慮することもない。私にとつての“剣道”が、本当の“戦闘技術”として磨かれていった時間だった。

私は来年、藤美に入学する。全国大会優勝者としての力量や学力などから、所謂スポーツ推薦という奴だ。染も男子の優勝者で“剛剣”とあだ名されるほどだったが、素行不良で通常受験だ。私と同じところに行きたいと言われたときは不覚にも少しドキツとしてしまった。そして今は彼の勉強を見てやっている。

相変わらず喧嘩は止めないが、近頃はそれでもいいかと思いはじめている。

なぜなら彼もまた、戦いを求める一人なのだから。

#02・剣の信頼（後書き）

毒島さんに勉強教えてもらってます。前世では大学入試受かったのにね。

#03・日常の死（前書き）

原作開始です。

*河陰 染

（かわなみ せん）

185cm / 70kg / 高校入学時より金髪 / 武器はトンファー

#03・日常の死

『ギヤアアアアア！』

スピーカーから流れる叫び声は、まさに日常そのものの断末魔だった。

静かな授業中の校舎が、一瞬にして戦場へと変わった。

「終わりの始まりだ……」

黒の得物を腰に挿すと、俺はトンファーを両手に部屋を出た。

さて、今寄宿舎から出たところだ。そろそろ来るかと思って最近
は授業をサボりまくってたが、功を奏したらしい。

黒塗りのトンファー（二代目）でゾンビどもを蹴散らしていく。
人を殴るのには慣れてるから、特に気に障ることもない。冴子も嬉
々として木刀を振っていることだろう。

冴子のことだから俺を探すことはしまいと、俺は全員が鉢合わせ
るだろう職員室を目指すことにする。

長い手足と脅威的な馬力から生み出されるスプリントが俺の身体
を加速させる。外見は金髪も含めて平和島静雄そのまんまだ。

途中にいる生き残りには目もくれず、まっすぐ職員室へと向かった。俺は役立たずをわざわざ助けるようなお人好しではない。

「っらぁ！」

トンファアの衝角の長い方でく奴らゝを薙ぎ払う。短い方で打突しないのは刺さると面倒だからなのと、万一にも噛まれないようにするためだ。

しばらく進んでいくと、ツィテールの小柄な少女と小太りの後輩がいた。小太りの後輩、平野コータは原作通り釘打ち器で応戦している。

そしてツィテールの少女——高城沙耶だろう——の背後にく奴らゝになった元教師が襲い掛かるうとしていたのを見て、俺は素早く腰に挿していた得物を抜き放った。

万全の状態のそれに人差し指を掛け、引き金を引き絞る。

ダアアアンッ！

崩れ落ちる影、炸音に驚いた二人がこっちを見る。

「ようコータ、とそっちは彼女か？」

「誰が彼女よ！」

俺のジョークに突っ掛かってくるツィテール。コータの方は、俺の手にある得物に釘付けのようだ。コータとは実を言うと面識があって、謂わば喧嘩仲間のようなものだ。右手に構えたそれに顔を近

付けて興奮しながら聞いてきた。

「.44オートマグ、しかもカスタムモデル！ 河陰先輩、どーしたんスかこれ！？」

「あ？ 前にヤクザ下のチンピラにつけられてたときに、路地に誘い込んでぶっ殺してなア。そんな時にちよろまかしたんだよ」

「どんな危険な橋渡ってんスか！」

「え、河陰って……じゃあこの金髪がああの“戦車男”！？」

“戦車男”、いったいどのどいつが呼び出しのか知らないが、俺を指すあだ名の一つだ。他にも“剛剣”とか“化け物”とかいろいろある。さすがに“自動喧嘩人形”はないが。

と、そこへ聞き慣れた凜とした声が響いた。

「ほう……それは初耳だな、染」

「さ、冴子……」

相棒、毒島冴子だ。どことなく怒りのオーラを感じるのはなぜだろう、なぜだろう……。

「まあ、今はいい。話はこいつらを片付けてからだ！」

冴子は手近な一体を、鉄芯入りの木刀で殴り倒す。俺がいるせいで、原作より腕は上がっていると思われる。ちなみに鉄芯入りなのは、俺のトンファーと打ち合つと普通の木刀ではすぐに折れてしま

うからだったりする。

少し遅れて小室や宮本も参戦してきた。

俺はオートマグをコータに預けトンファーを握ると、<奴ら>の一体の胸目がけて突き放った。宙を舞い、数体巻き込んで動かなくなる。後ろで高城が人外でも見るような視線を向けているのを感じた。

五人がかりで挑めば<奴ら>はすぐに殲滅できた。落ち着いたところで冴子が簡単な自己紹介に入る。

「鞠川校医は知っているな。私は三年A組の毒島冴子だ」

「剣道部主将で去年全国大会で優勝した毒島先輩ですよ。私、槍術部の宮本麗です」

「二年B組の小室孝です」

「えっと……ぼ、僕は平野コータです。二年B組です」

「B組の高城沙耶よ」

冴子の顔が俺の方を向く。優しい笑顔に逆らえない雰囲気の内包していた。仕方なく口を開く。俺って甘え……。

「河陰染……」

「うむ、よくできたな」

「……うつせえ」

職員室に入り、机を移動させてバリケードを作る。ようやく落ち着ける環境ができた。

「皆……染以外は息が上がっている。少し休もう」

冴子が俺をちらりと見て微笑む。俺はどうにも見ていられなくなつて、顔を反らした。

「ところで、さっきの銃のことなんだが……」

「……」

冴子の笑みが消え、真面目な表情になる。・44オートマグを構えたり分解したりしてはしゃいでいたコータの手も止まった。とたんに場の空気が緊迫する。

「こっちを向け」

言われた通りに反らしていた顔を冴子に向け、目を合わせる。

俺の右頬が爆ぜた。

「……これでチャラだ。あまり私を心配させてくれるな」

「ああ」

冴子の表情から険しさが抜けると同時に空気が弛緩する。修羅場（？）の終わりを告げるように、俺は椅子を引いた。

「え、えっと……二人はどういう関係なんですか？」

恐る恐ると言うよりまさかと言った口調で宮本が訪ね、他の面々も興味があるのか俺たちを見つめる。それに冴子が答えた。

「染とは中学からの付き合いで、今は恋人だよ」

「……は？」

さも当然と言つてのける冴子に、鞠川を除いた宮本以下四名は啞然として目を見開く。最凶の不良と才色兼備の剣道部主将が恋仲とあればそりゃ驚くかもだが、ここまで露骨に反応されると俺もイラつく。文句あつかこの野郎。

机の端を掴む指に力がこもる。

「こんなDV男と付き合ってるなんて、信じらないわ！」

高城の心ない一言に机が悲鳴とともにひしやげた。

「誰がDV男だゴラッ」

「やめろ染、誰が何と言おうと私は愛しているぞ」

「……チッ」

冴子の制止にトンファーを持つ俺の手が下がる。……まったく、こいつがいると強気に出れない。これが惚れた弱みとか言う奴なのか？

「そう言うな。染は確かに喧嘩っ早いが、それはただ戦いが好きなだけなのだ。少なくとも“暴力”振るう人間ではないよ」

冴子が俺の代わりに言い返すのに少し気をよくしながら再び席に着く。

「こつ見えて染はとびきり優しいんだ。短気で独占欲も強いが、頼り甲斐のあるいい男だよ」

そこまで言って冴子は俺の肩に手を置いた。

「まあ、独占欲は私の方が強いかな」

やばい、こいついい女すぎる。

そこへ元から俺たちの仲を知っている鞠川が両手を重ねて言った。
“模擬戦”で怪我の多い俺たちだから、保健室は常連で校医ともよく顔を合わせている。

「相変わらず二人はラブラブねえ。ところで、これかどうするか話し合った方がいいと思うんだけど……」

鞠川の言によりやく主人公が口を開く。

「僕たち二人は家族の安否を確認しようと思っています。必要なら助けて、その後はどこか安全なところを見つけて……」

「……」

宮本が俯いている。冴子と俺を見て、死んだ恋人のことでも思い出してるんだろうか。

「彼女はあんまし乗り気じゃねーみてえだが」

「えっと……恋人が麗を庇って噛まれて、それで落ち込んで。空手部だったんですけど……」

「ああ、んでその恋人の頭をお前がかち割ったってところか？　まあ、プレイヤーであってファイターじゃなかったってことだな」

「染っ……」

冴子が咎めるが俺は気にしない。基本的に相棒兼恋人の冴子と親友のコータ以外に情けをかけるつもりはない。ここに来るまでに何人か見捨ててきたしな。

「えっと、とりあえず情報がほしいから、テ、テレビ、つけますね……」

コータがりモコンを取ってテレビをつけると、ニュースが一連の怪奇事件について報じていた。いわく暴動だとか、家から出るなどか。

いよいよ現実味が出てきたな。

小室が拳を机に叩き付ける。

「それだけかよ、どうしてそれだけなんだよ！」

「パニックになるのを恐れてるからよ」

憤慨する小室に高城が冷静に返す。

「今さら？」

「今だからこそよ。パニックが起これば、秩序が崩壊してじきに各地が無法地帯になる。そうなってしまうえば、もはや<奴ら>に対抗することは絶望的だわ」

きっぱりと言い放つ高城に宮本が弱々しく反論する。

「でも、どこかに安全な場所はあるはずよ。きっとすぐいつも通りに……」

「なるわけないし」

「そんな言い方ないだろ」

「パンデミックなのよ、仕方ないじゃない！」

おうおう、沙耶ちゃん絶好調だな。俺は持ってきたカロリーメイトを冴子とともにかじってその様子を傍観している。

するとコータがパンデミックについて聞き返した。すかさず高城が答える。

「感染爆発のことよ。世界中で同じ病気が大流行してるってこと」

「インフルエンザみたいなものか？」

「だとしたら性質の悪いフルだぜ」

俺は小室の例えに嘲笑する。

「一九一八年のスペイン風邪はまさにそう。感染者は六億以上、死者は五千万にもなったんだから。最近だと鳥インフルエンザにその可能性があるって指摘されてたわね」

「どちらかと言うと、十四世紀の黒死病に近いかしら」

鞠川が言った。

「そのときはヨーロッパの三分の一が死んだわ」

「どうやって収まったんだ？」

「たいていは死にすぎると終わりね。感染すべき人がいなくなるから」

「でも、死んだらく奴ら>になって襲ってきますよ」

鞠川の言葉にコータが疑問を投げ掛ける。分解されていたオートマグはいつの間にか組み上がっていて、替えのマガジンも懐にしま

われていた。手慣れてんな。

「感染が止まる理由はないというわけか」

冴子が言うと、鞠川が思い付いたように話した。

「あ、でも肉が腐って骨だけになれば動かなくなるかも。夏なら二十日くらいで一部は白骨化するから……」

「本当に腐るかどうかなんて分かんないわよ」

高城の反論に俺が答える。

「だがく奴らゝ、皮膚が鬱血してたから壊死^{えし}して腐る可能性もあるんじゃないか？ 皮膚がただれて血が出りゃ、失血多量で内側から腐るぜ」

「でもこれと言った腐臭はしなかったわ。動く死体なんて医学で説明できる存在じゃないのよ」

さいですか。

「家族の無事を確認してからどこに逃げ込むかが重要だな。とにかく、好き勝手に動いては生き残れまい。チームを組むべきだ」

冴子の意見に全員がうなずき、それぞれが自分の得物を構える。小室が車について質問した。

「鞠川先生、車は全員乗れるんですか？」

「うーん、私のはコペンだから無理ね」

「――遠征用のマイクロバスがありますよ」

窓の外を見てコータが言う。

「全員乗せられるのはそれだけだな。よし、まずはそこを目指そう」

バリケードを解体し、俺たちは出撃した。

#04・戦恋（前書き）

脱出です。

なんか毒島先輩がヤンデール（ry

#04・戦恋

職員室をですぐのところにいたく奴ら>をコータが釘打ち機で狙撃する。後方支援を受けて安全に室内から出た俺たちは、おのあの武器を構えて突進した。

「駐車場までは正面玄関から行くのが近いっ。そこを突破しましよっ！」

「分かった！」

小室の提案に冴子が乗る。冴子が賛成するってことは俺も賛成するってことだ。俺は前に出て、立ちふさがる敵をことごとく蹴散らしていった。避ける必要もない。予備動作なしの一撃で数メートル吹っ飛んでいくく奴ら>は滑稽にさえ見えた。

討ち洩らしは冴子たちが片付けるため、事実上の殲滅だ。斜め後ろからコータが敵の密度を減らしてくれるおかげでかなり動きやすい。

「づああっ！」

水平方向への振撃で道を開ける。壁に叩き付けられた奴が、キャンバスに赤い花を咲かせた。

「キモッ……」

量産されていくペイントに対する高城の反応に、俺は口端を歪める。

廊下を進んでいくと、さっきの倍くらいの数のく奴ら>が彷徨っていた。

その光景を見て、冴子と高城が言う。

「無理に戦うことはない、避けられるときは絶対に避ける。」

「連中音にだけ敏感よつ。それにドアを破れるくらいの腕力があるから、捕まれたら食われるわ。気を付けて！」

んなこと言われたってなア？ 俺の場合、殴れば無条件に“飛ぶ”んだが……。

とそこへ、階段の方から悲鳴が聞こえてきた。

「やめろつ、来るな……！」

あーあー……騒いじまって、死にたいのか？

すると階段にいた男女数人に迫っていたく奴ら>が突然崩れ落ちた。コータがヘッドショットをキメたらしい。

「グッドキル！」

見事な射撃に称賛の言葉が出た。

冴子や小室が助けに駆け付けるのを黙って見つめる。生き残りなんて、俺にとつてはどうでもいい存在だ。助けたところでさして役に立つわけでもないし、見捨ててもせいぜい心の清らかな奴がわずかな罪悪感を感じるだけだ。

再び冴子と並ぶと、小さな声で話しかけてきた。

「……君らしいな、染」

「あいつらの末路なんて一つしか予想できねえからな」

「染のそういうところは嫌いじゃない……。でも、少し寂しい気がする」

「……」

冴子は俺の手を数秒握ると、さっと放して全員に発言した。

「このまま校舎を進んでいても、襲われたときに身動きが取れない」

「やっぱり玄関から正面突破をかけるしかないのね」

幾分精神の回復した宮本が答える。

「どちらにせよ、高城君の説を検証してみる必要があるな」

「——それなら、俺が……！」

さっきからいまいちぱつとしない小室がここぞとばかりに名乗りを上げた。今はまだカリスマはそれほどでもないから、気にしてい

るのかも知れない。まあ献身的なのは悪いことじゃない。

しかしその勇気もむなしく、冴子に棄却されてしまった。

「……君の心意気は買うが、私は染を推すよ」

だろうな。

「理由を聞いてもいいかしら？」

小室の立候補に反対して恋人の俺を推奨したことへの、確認の意味もこもっているのだろう、高城が若干眉根を寄せながら訪ねる。

「一対多なら染以上の経験者はいないし、万一の事態にも対処しやすいだろう」

「リスククリークってやつだ。こういうのは場慣れしてる奴がやった方がいい」

「……分かったわ」

高城は納得して口をつぐむ。俺は一人玄関へと歩いていき、亡者の目の前に立った。外出用（喧嘩用）の運動靴が足音を効率的に消してくれ、かなり接近しても気付かれることはない。

視覚の退化を証明した後は聴覚だ。俺はそつと青紫色のゾンビ野郎の首にトンファーを添える。後ろで冴子たちが嫌な予感をしたのがなんとなく伝わってきた。そのまま食い込ませ、顎骨の突起と頸椎の間に引っ掛けると――

「シッ……！」

——思い切り振り飛ばした。

バンッ！

無音で宙を移動しロッカーにぶち当たると、盛大な音を立ててく奴ら>を引き付けた。

左手をにかけて合図すると冴子たちが追ってきた。速やかに玄関を抜けるのを確認し、俺も駆け出そうとしたそのとき——

カアアアンッ！

——先ほど階段で助けられた男子生徒の持つ指叉さすまたが、ドアと接触して大アタックを響かせた。

「マヌケが……」

「走れ！」

<奴ら>の顔が一斉に俺らの方を向いたこの状況なら誰だって走り出すだろうさ。足手纏いとなった男子生徒と、あたりまえのことをわざわざ口に出してさらに<奴ら>の注意を引いた小室に多大な殺意を覚えながらも、俺はなんとか感情の吐き出し口を群がるゾンビどもに移し替えた。

お前らのせいで俺の面倒がすべてパーじゃねえか……殺す殺す殺す殺す殺す殺す——

後ろでガヤガヤ騒いでいる声、冴子の「あれはマズいな……」と言う声以外の音が認識できなくなる。

「殺す……！」

俺はストレス発散のために<奴ら>の中から手頃な個体を^{ターゲット}標的に定めると、体勢を低くして一気に敵の懐^{ふところ}に入り込む。

そして標的の下顎目がけ、黒塗りのトンファーを振り抜いた。

本気の“全力”で。

「あれはマズいな……軽くキレている」

<奴ら>の特性を調べたらそのまま迅速にバスまで移動する手はずだったのが、不注意や口論などで見つかり完全にふいになってしまった。

あまりに稚拙な失態に染は大分ご立腹のようだ。しかも大元の原因が私の助けた生徒によるものだから、心象は“最悪”と言っている。私がもつとしっかりしていれば……。後で謝っておこう。

皆が走り出し、こぞって<奴ら>に殴りかかる。私も木刀で的確に頭部を狙い潰していく。

すると十メートルほど先で、溜まった鬱憤を晴らすかのように染がトンファアの先を一体の顎へと打ち入れるのが見えた。あの速さではおそらく、私以外の目には染の腕が一瞬消えたように映ったはずだ。

しかし次の瞬間は、間違いなく全員の目に焼き付いたことだろう。

——雷のごとき踏み込みから、一瞬も置かずして、その首を撥ね飛ばしたのだから。

花火のように弾け、二つの肉塊が落ちてくる。重い方が一秒、軽い方は三秒。

見事な一撃。背筋に絶対零度、脳髄に灼熱を感じた。ああ、こうでなくてはい……！ どうしようもなく血が騒ぐ。加虐的な“私”が快感を訴えた。

「流石は私の選んだ男だ……」

痺れるとはこういうことを言うのだろうか。

戦意たぎる光景に、ついつい部活の後輩にも見せたことのない鋭い笑みを浮かべてしまったのは仕方のないことだ。……そうだろうか？

「ぐわあっ！」

指叉を持った彼の悲鳴が聞こえるが、無視してバスを……いや、染の隣を目指す。まったく、自分で＜奴ら＞を呼んで勝手に食われていては世話ない、なんて愛しいあいつの真似事。

障害になる＜奴ら＞の側頭部を袈裟懸けで穿ち、続いて来たところに蹴りを入れ突きで仕留めれば、もう駐車場だ。

＜奴ら＞を血塗れの流れ星に変える染に声をかける。

「染っ！」

「冴子！」

目の前の敵を黙らせて、互いの背中を合わせる。私の意思を分かってくれているようで頬が緩んだ。

周囲の敵を退けていると少し遅れて小室君たちが現れる。

「鞠川先生、キーを！」

「ええ！」

マイクロバスのドアがエアの音とともに開く。非戦闘員の鞠川校医と高城君、他生徒たちを優先して乗せ、小室君が呼び掛けてきた。

「先輩たちも乗ってください！」

「いいが、あのクソツタレはどうする？」

染がトンファーで指し示す先を見れば――

「たっ、助けてくれえ！」

――内の担任の紫藤と数人の生徒だった。

「あつ、あんなやつ、乗せることないわ！」

「麗！？」

小室君たちは揉めているが、少しでも長く染とともに戦えるなら正直どちらでも構わない、紫藤は気に入らないが。染も同じだろう。

そうこうしている内にも紫藤は走ってくる。

「先輩！」

振り返ればすでに紫藤たちは乗っているようで、小室君が叫んでいる。

だがしかし、それに甘えるわけにはいかない。バスの前ではく奴ら>が分厚い肉の壁を形成していた。これを崩さねば、脱出は磐石ばんじやくとは言えない。

「問題ない、バスを出せ！」

染が言い返すと小室君は悟ったのか中に引っ込んで、直後バスのアクセルが唸りを上げた。

「分かってるじゃないか」

進行方向上のく奴らゝを脇へと殴り飛ばしていくとバスが迫り、潮時と判断した染に抱えられて飛び上がった。

人間のものとは思えないほどの跳躍力に感心しながら、バス上面にトンファーを突き刺す染の腕を見つめる。ふと“あの日”のことを思い出して懐かしくなる。

「くっ……！」

振り落とされまいとしがみ付く力を強くする。それに反応して私の脇を抜ける染の腕にも力がこもった。

抱き返してくれたのに嬉しくなって、私はニヒルに歪んだその唇に噛み付いてやった。

#05 小室小隊

重なった唇を離した。

「……珍しいな」

「私だって、たまには大胆にもなるさ」

火照った顔で答える冴子。普段からこいつは恋愛表現には慎ましかったので、言葉で伝えてくることはあっても行動で示すことはしない。がつつくのは女として淑やかしとではないと考えているのか、キスやらなんやらはたいてい俺からだ。

「恋人のかっこいいところが見れたからな……ご褒美だ」

「人の首撥ね飛ばして喜ぶ女なんて、お前だけだろうな」

「それはつまり、“染には私だけ”ということだな」

「……こりゃあ一本取られた」

——本当に可愛い奴だ。

俺が冴子を抱く腕に力を込めると、冴子は少し抵抗する素振りを見せてまっすぐに目を合わせてきた。

「どうした？」と問いかければ、力なさそうに話す。

「謝らなければならないことがあるのだ」

冴子の言葉に若干驚くが、特に心当たりがない俺は黙って続きを促す。

「さっき私が助けた生徒のことだ。私が監督を怠^{おこた}ったせいで、余計な手間を――」

「言うな」

まったく、何を言いだすかと思えばそんなことか。

何でもないことを気にして、考え込んで……。

「そいつを助けたのはお前の勝手だ。どうしようも自由だが、お前がどうかする必要があるてねえんだよ。それに、役得だとも思ってるんだぜ？ 冴子と一緒に戦えたし、こうしてキスもできるしよ」

「染……」

はにかむ冴子の唇を奪う。今度は俺から。こんなこと、人前じゃできようもない。不謹慎だとかキスシーンを見られることが恥ずかしいとか言うわけでもない、こんなに艶やかな冴子を他人に見られたくないのだ。

どうしようもない独占欲。ああ、ベタ惚れだよこんちくしょー。

バスが停まると、俺は車体からトンファーを抜き去り、冴子を伴いながらバスの上から降りた。ドアが開き中に入れば、そこにはともにも脱出した連中、ついでに紫藤がいた。

「なんだ、指叉野郎さすまたはいないのか。自分の失敗で敵呼び寄せて、それで食われてたら世話ねえわな」

「河陰先輩……」

宮本が睨み付けてきた。気持ちは分からなくもないが、それじゃ戦士には不向きだ。死者は死者。この壊れちまった世界には、“死んだら皆お友達”なんてもはや通用しないのだから。むしろ死んでからが本番と言える。

じゃあ自分はどうなのかと聞かれても、俺はその問いに答えるべき言葉を持っていない。なぜなら冴子が死ぬほどの状況なら、俺も生きている望みは薄いからだ。最強の肉体をもつてしても、不可能は存在する。俺たちの“模擬戦”の勝敗がほぼ拮抗しているのもそのためだ。剛と柔、片方がもう片方を補完できない状況に陥れば、“俺たち”は敗れる。ゆえに死別はあり得ない。

冴子と俺は、互いが互いの剣であり、同時に使い手でもあるのだ。

俺たちが前の方の座席に隣り合って座ると、鞠川がバスを発進させた。

僕には河陰先輩という人が理解できない。麗もあまりいい印象を受けてないみたいだ。

それは多分、この状況で誰よりも高揚していながら、誰よりも冷静でいるからだろう。突然の日常の崩壊にも、微塵も動じている風に見せない胆力は褒められたものだと思うけど、正直言って異常だ。平野が言うには、暴力団とタメ張れる個人としての“最高戦力”らしいけど……。

「あんな目も見えない青っちょろいゾンビに何を怯える要素がある？」

確かに必死で抵抗する人間に比べたら、＜奴ら＞の方が幾分倒しやすいのは事実だ。数の力にだけ気を付けていれば、倒せない敵じゃない。

でも、それだけだろうか？

＜奴ら＞になったとして、人を傷付けるという禁忌はなくなるだろうか？ いや、ない。それはない。少なくとも僕にはそれを完全に捨て去ることはできない。

「射撃訓練で人型的を使うのと同じさ。河陰先輩は人型を殴り慣れてるから、後は力加減の問題なんだよ。殺していいか悪いかの違いさ。まあ、普通の問題でないことは確かだね」

河陰先輩と親しい平野の言によれば、筋の通った理屈ではある。

裏と堅気^{かたぎ}の違いだと思うことにして、僕は考えるのをやめた。

「いきなり天井に穴が開いたから驚きましたよ」

コータが頭を掻きながら言う。

「なんでそんな棒みたいな武器で自動車の車体に穴が開くのよ……」

高城は呆れたように腕を組むと、冴子がそれに答える。

「染は特異体質なのだ」

「特異体質？」

「ああ、常時人間としての“たが”の外れた力をだせる。あまりに強力で幼い頃は自らの力に身体が耐え切れず入院を繰り返していたらしいが、その度に異常な回復力を見せて、徐々に骨格が馬鹿力についてこれるように進化したらしい」

「それで棒で人の首を飛ばせるようになるわけ……？」

「最初は私も染が人間であることを疑ったよ」

「おい」

冴子の告白にツツコミを入れる。

それは言わない約束だ。約束なんてしてねーけど。

「河陰先輩はリアルで銃弾より鋭いパンチ出せますもんね」

「まさに“戦車男”ね」

「……お前ら俺のこと何だと思ってんだ」

俺が睨み付けると、二人は顔を反らしやがった、チツ……！

そう言えば、と小室が切り出す。

「先輩のトンファーってどうなってるんですか？ あんな使い方しても壊れないなんて……」

「それはコータに聞いた方が早いな」

小室が怪訝^{けげん}な顔を見ると、スイッチが入ったようにコータの目が光を放つ。

「TB-X ボーンクラッシャー。僕の父さんのコネで、アメリカの警察下請け企業によって河陰先輩専用に製作された世界最強のトンファー・バトンさ！ 最近のアメリカ警察はトンファーから伸縮警棒への移行が顕著だから、嬉々として作ってくれたよ。重量四三九六グラム、タングステンとダイヤモンドを組み合わせた超硬度鋼を採用し、表面は酸化被膜で覆われているから錆びることもない！ 生産数は六本で、内四本が河陰先輩の手にある。あらゆる性能が

先輩基準だから、常人じゃ重すぎて扱えない、まさしく漢のロマンだよ！」

トシファー・バトン

T B I X、特注の品だから型番はXでシリアルも存在しない。ツヤ消しの黒い凶器だ。名前もF Mのボンバスターやミヨルニル、オルトロスといろいろ候補はあったんだが、最終的には使用者である俺の独断でボンクラッシャーに決定した。変形する超生命体のアレである。

「四キロって、そんな両手に持つてるのか!？」

「甘いよ小室。これが完成するまで河陰先輩、道路標識とかガードレール振り回してたんだから。先輩にとっちゃ汎用性軽量武器だよ」

「……」

小室は声も出ないらしい。まあ俺との接点皆無だったしなあ、名前以外は知らないか。四キロつつたら両手に長刀持つてるようなもんだし。あまりの性能にチンピラなんざ鎧袖一触って感じだったな。

ふと、後ろが騒がしいことに気付く。とたん、金髪不良（俺じゃないぜ）がわめき出した。

「まったく、なんでこんな目に合わなくちゃなんねーんだ！いきなり全部おかしくなっちゃまうしょ。こーいうときは立て込めるのがセオリーだろ!？」

うるせエな……。

「僕たちは家族の安否を確認するために町へ行くんだ。マイクロバ

スに乗ってるのもそのためなんだよ！」

小室がなんか言ってるが正直くだらねえ言い合いだな。

……腹立つ。

「染……？」

「あー、大丈夫だ。あのアホが変な気起こさなきゃ何もしねーよ」

冴子が心配そうに見てくる。さすが車内で手を出すと変な空気になっちゃうからな、我慢だ我慢。

「彼の意見も考慮し、やはり私たちはどこか安全な拠点を得てから行動すべきでしょう」

「もっともらしいこと言いやがって、胡散臭いったらねえな」

俺は苛立ちを押さえつけながら、話を右から左へと流していった。トンファーを磨いてなんとか平静を保つ。

しかしその努力は速攻で踏み躪られることになった。

「だからよお、このまま進んだって危ないだけだろーがよお！ だいたい、なんで俺らが付き合わされなきゃなんねーんだよ！？ 町に戻るのはお前らが勝手に決めたことだろーが！ 学校の中で安全な場所オブツ！」

「染……」

ウゼエウゼエウゼエウゼエ……。

せっかく我慢しててやったのに、このアホ……。俺は泡を吹くクソ金髪野郎の腹から拳を抜き、倒れ伏したところを蹴飛ばしてやった。

「さっきから聞いてりやグダグダぬかしやがって……勝手に乗り込んできたのは手間エらだろーが。立場つてもんわきまえやがれ」

吐き捨てると、冴子が頭を押さえるのが分かった。しゃーなーだろ、ム力ついたんだからよ。

すると怯んでいた紫藤が自分のペースを取り戻したようで、拍手しながらそのいけすかない口を動かした。

「いやあ、見事な動作でした。しかしこれは私の言ったことの証明でもありますね。私たちにはリーダーが必要なのです、すべてを担うリーダーが！」

何考えてんだこいつ。ダメだ、馬鹿の言うことは理解できねえ。

「アホがアホやってのされただけだろ。そもそもお前はリーダーつてもんを勘違いしてるな、紫藤」

俺のダメ出しに遺憾だ、とでも言うように紫藤は眉間に皺しわを寄せる。

「どういふことです……？」

「分かんねえんなら資格なしだな。いいか？ リーダーが大勢を率

いるんじゃない。それぞれが特定の個人についていつて、そいつがリーダーになるんだ。押し付けがましく自分がリーダーだって言う奴が一番信用ならねえんだよ、お前みたいにな」

カリスマつてのは黙つても発動するもんだ。いちいち口車に乗せねえと人の上に立てないのは三流、または宗教家の類たぐいだ。

だいたいこの状況化でリーダーを自称する奴なんて、単なる偶像にしかなりえない。いたずらに依存を招き、かえって足手纏いを増やすだけだ。

そこまで言うと、俺は再び席に着き、何も言い返せないでいる紫藤を無視して宮本に話しかけた。飛び出してもらっても困るしな。

「宮本」

「な、何ですか……」

「俺たち全員、お前と同じで紫藤が嫌いだ。あんなのは信用ならねえ。それに、いつまでもこのバスに乗ってるわけにもいかなーし、頃合いを見て乗り捨てる必要がある。ここまでは分かるな？」

「な、分かるけど……それが何？」

「簡単に言つとだ、飛び出すなつてことだよ。はぐれるといろいろ面倒だろ？ 加えて俺たち、鞠川含め七人だが、一つの軍組織として考えるとなかなか都合がいいんだよ」

「いまいちよく分かつてない風の宮本に、意味を正しく理解したコ
ータが答えた。」

「河陰先輩が言ってるのは、僕たちは戦力としての役割分担が上手くいってるってことですよ。小室を司令とするなら、宮本さんと毒島先輩が歩兵、河陰先輩が戦車兵、僕が砲兵、高城さんが参謀、鞠川先生が医療と輸送で衛生兵といった感じで――」

「ちょっと待てよ、僕が司令!？」

おう、予想通りのツツコミだな。納得できない小室に俺が答える。

「小室、お前は俺たちの中で一番使えない。冴子や俺、宮本ほどの戦闘力があるわけでもなければ、コータや鞠川みたく専門技術もないし、高城ほど頭もよくない」

「え、まあ……」

「だからだ」

「はい?」

俺は一息ついて言葉を続ける。

「だから、お前は俺たちを有効に使うことを考えろ。それはお前にしかできねえことだ。それに、お前に対しては全員がある程度認めてるしな」

「……」

「返事っ」

「は、はい！」

「ん……まあ、あんま気負うな。これまで通りやればいい」

小室は自分がアテにされていることを実感したのか、少し高揚して
るみたいだ。まくし立てると俺は満足して、早めに眠りにつこう
と目を閉じた。

#05 小室小隊（後書き）

小室小隊へのツツコミは次話に……。。

#06・下車（前書き）

PV82159、ユニーク13610、お気に入り299。
いつの間にかかなり伸びてきましたね。ありがとうございます。

#06・下車

目を開けると、空気に溶け込むわずかな陰りの中に白い肌を称^{たた}えた愛しい冴——

「……あ、河陰先輩。起きました？」

——ではなく、俺の顔を覗き込む小室の姿があった。

「……なんで寝起きで野郎の顔拝まなくちゃなんねーんだ」

「す、すみません……」

「私ならここにいるぞ」

凜とした意思の強い声が左耳から入ってくる。その方向に首を回すと、今度こそ愛しい冴子がいた。

少し頬が緩むのを感じながら、小室の方に視線を戻す。

「今何時だ？」

「五時頃ですけど」

「そうか」

となるとそろそろか……。

ブウウン……

聞こえる聞こえる。渋滞中の道路に似付かわしくない、エンジン全開の音が。窓から車外を見れば、左手に半円状のトンネル。右手には盾となる乗用車が――

「――ねえし」

おいおい……さすがに何もかも原作と同じとは限らねえとは思ってたが、それはねえよ。いくらなんでも死亡フラグすぎるだろ……。

「ああ、しゃーねえ」

俺は急いで席を立ち、マイクロバスの扉に手をかける。

「染っ!?!」

「河陰君!」

「先輩!」

制止の声を背中受ながら、俺は外へ飛び出した。こっちはマイクロバス、向こうは、見てみれば案の定大型バス。このまま見てたんじゃいずれぶつかる。ぶつからなくても、この車なら擦っただけで横転しそつだ。

俺は迫る長方形の壁に向かい、できるだけ重心から離れた場所に

立ちふさがった。拳を掌に打ち付け雄叫びを上げる。

「来いやあああ！」

右の間道から突っ込んでくるゾンビ満載の大型バスを視認して、後ろで冴子たちが騒ぐのが聞こえたが、親指を立てて返してやった。

首筋を噛まれる運転手が見える。フロントガラスに着いた血の跡まではつきり見える。

俺は左足を地面に打ち込むと、完全に埋まったのを確認して両手を構えた。迫りくる大質量が、俺を引きちぎらんとさらに速度を上げる。

「うらあああああ！」

引き伸ばされる感覚にバスのフレームをしっかりと捕らえ、背筋と腹筋が重機のごとき出力で収縮するのを骨格が無理矢理運動に変換させた。

私は今、信じられないものを見ている。どう信じられないかと言うと、それは、もう、とにかく信じられないのだ。

今までも様々な信じられないものを見てきた。片手で木刀をへし

折ったり、道路標識やガードレールを振り回したり、リムジンを蹴り飛ばしたり……。

しかしこれは、輪をかけて……いや、人間に許された限界を超えに超えた境地だ。私は瞬間、戦慄した。彼に迫る危機に、それを弾き返した彼の力に、そしてそんな彼の愛に。しかしまた一瞬の内に、その戦慄が“恍惚”というものであると理解した。

あまりに強い。あんな力を制御できている染は。私ですら自分の力を持て余したことがあるというに……。

いや、違うか。あいつは私といることで、自分を保っているんだ。保ってられるんだ。そして、私も。

そんなことを考えながら眺める風景には、一台の宙を舞う大型バスがあった。

「……河陰先輩、ありがとうございます！」

コータがおにぎりを貪る。むしゃ高城はその横で迷惑そうにパンを少しずつかじっていた。

「嬉しいには嬉しいんだけど……いつの間に？」

「あ？ 昨日は早く寝すぎたから、夜中に起きちまって。暇だったからちよつとな」

「ちよつとって……」

昨日はまだ日の出てる内に寝たから、真夜中に目が覚めてしまった。どうにも寝付けずコンビニに明日の朝飯でもというわけだ。

案の定コートは腹を鳴らしていたし、皆空腹だったから調達してきた。

「コンビニ袋に入れて持ってくるだなんて信じられないわ」

「コンビニで買い物してコンビニ袋使うのどこが信じられねーってんだ。買ってねーけど」

高城の言葉に俺は反論する。至極理にかなってると思うが。

「ガサガサ音たてるじゃない！ それに片手ふさがるし……」

「く奴ら>ぶつ殺すのに片手もあれば十分だが。むしろお釣りがくるくらいだ」

「……もう何も言わないわ」

まったく変な奴だ。あんなのろま相手に俺が遅れをとるわけがないというに。

「でも助かります先輩。これから動くつもりでしたし」

「小室の言う通りだね。この渋滞、ただの渋滞じゃなさそうだし」

「御別橋の方も見ておく必要があるな」

朝飯はなかなか好評のようだ。まあそれもそうか。

俺はできるだけカロリーの高いものを選びながら食していく。後の紫藤たちにも分けなければならぬのは癪しゃくだったが、仕方ないので分け前を与えている。その代わり高城のバッグには缶詰などの保存食を隠し入れておいた。

「昼頃には出るんでしょ？」

宮本がようやくといった感じで呟く。小室が同意した。

「僕らはこれからこの先の御別橋の状況を確認して、なんとか渡河できないか試す。どうしても無理な場合はどこか適当な場所で休息するしかないけど」

「不確かなことが多すぎるからな、そんなもんでいいんじゃないか？」

とまあ、同意してから数時間後。俺たちはヒートアイランドな中を歩いていた。

「平野があんな風に大きな声出すところ、初めて見たわ」

「あ、ありがとうございます、高城さん」

コータは照れたように頭を掻くが、釘打ち機のストックは肩に据

えらたままだ。さすがといったところだろうか。しかしコータ、それは別に褒められてるわけではないと思うぞ。

「平野君も男子おのこだということだな。それにしても……昨日の“アレ”は驚いたよ、染」

冴子の言葉に俺を除いた五人の表情が引きつる。冴子が切り出したのは昨日の“アレ”のことだ。他の奴らからは敢えて触れなかったような気配がしたが、話題は提示されてしまった。

「……なんか昨晚夢で河陰先輩がバスを投げ飛ばしてるのを見た気がします」

「奇遇ね……私もよ」

「アタシも……」

「先生も見た気がするわぁ……」

「……ぼ、僕も」

小室、高城、宮本、鞠川、コータの順だ。全員遠い目だったが、冴子だけがなぜかニコニコしていた。

「投げ飛ばしたっつーか、受け流したって言った方が適切だな。かなり派手に横転したけどよ」

俺があ的大型バスを受け止めてから、バスは前につんのめって後輪を浮かせ、そのまま力の向きに逆らうことなく投げられたことで派手な横転をキメた。その後間もなく炎上し、中から炎を纏ったく奴ら>が湧いてきたが放置しとけば勝手に動かなくなった。

「戦車兵というのも、なかなかどうしてぴったりの例えだな」

「戦車そのものよ……。だいたいなんであんな狙い澄ましたように目が覚めるのよ、獣じゃあるまいし。」

ご機嫌な冴子に高城が返す。冴子は俺の身体を心配して大丈夫かと聞いてくるが、多少手足が痛んだものの一晚寝れば痛みも引いていた。

「つーか、なんでお前はさっきからそんなニコニコしてんだ？」

「うん？　なぜとは、私たちが互いを必要としていることを再確認できて嬉しいのだ。あれほどの力を持ちながら正気でいられる理由を考えていたら、剣道部に入ってから染が少しずつ丸くなっていったの思い出してな」

「あーもう分かったからそれ以上言うな——それより……」

俺たちの声を聞きつけてか、＜奴ら＞が建物の中から続々と姿を現した。

「パーティタイムだ」

俺たちはそれぞれ自分の得物を取り、包囲網を突破すべく走り出した。

#07 パーティータイム(前書き)

PV120531、ユニーク20173、お気に入り402。

遅れました(´・ω・`)
ななわです。

#07 パーティータイム

「パーティータイムだ」

冴子と俺、宮本が真っ先に＜奴ら＞の懷^{ふところ}に飛び込む。それぞれの得物が正確に頭を穿ち、無力化していく。まだそれほど多くはないが、コータの持つ釘打ち機の音を聞きつけてか、狭い路地からも続々と湧いて出てきた。

「数ブロックそれだけでうじゃうじゃいやがる……！」

大通りと違って人が少ないため足を捕られることはないが、代わりにエンジン付けっ放しの車が多く＜奴ら＞を引き付けている。加えて戦いながら御別橋に向かうにはやや遠かった。

しばらく進むと、コータ、高城、鞠川の三人の走りが遅くなる。

「ちょっと待ってえ、先生疲れちゃった！」

「ぼ、僕も……」

「だらしないわねえ……」

「高城さんだつて肩で息してるじゃないですか」

「うつ……わ、私は女の子なのよ、男と一緒にしないで！」

「……はい」

仲いいなこいつら……。

そんなことを考えながらも、俺は腕を止めない。あらかた片付けたところで小室が三人の意を汲み、歩きを提案した。

「歩こう。今は立ち止まらないことが最優先だ」

「小室の言う通りよ。それに、アタシたちはチームとして都合がいいんでしょ、戦車兵さん？」

宮本が皮肉混じりにこつちを見て言うのに、俺は目を反らして返した。

「釘打ち機の音がなくなれば、客足も減らあな」

「賛成だ。いざというとき走れた方がいい」

全員が同意し、俺たちは歩幅を狭めてできるだけ足音を立てないように歩き出した。俺はついでとばかりにガードレールを見やる。

「どうした、染？」

俺がトンファ―を腰のバンドに挿したのに気付いて冴子が声をかけてきた。

「いや、手頃なガードレールがあったからよ。もうすぐ橋だし使う

機会もあるだろ」

「うむ、そうだな」

俺と冴子の何気ないやりとりに、驚いた高城がツツコミを入れる。

「いやいや、手頃なガードレールって何よ……？」

「長さ三メートル以内でまっすぐなガードレールのことだ」

極めて分かりやすい定義を説明してやれば、高城は「もういいわ……」と耳をふさいでそっぽ向いた。

俺は“手頃なガードレール”に手をかけ握りしめると、そのまま真上に引つ張った。ネジが軋^{きし}み、自分の収まっている穴をキリキリと引き延ばす。指が白い塗装面に食い込んでいった。

——ギンッ！

独特な金属音を響かせて、ガードレールは自らを地面に縛り付けていた鉄柱から解き放たれた。俺はそれをひとしきり振り回して感覚を掴むと、斜めに肩に担ぐ。

「何ボーツとつつ立ってんだ。行くぞ」

「アハハ……」

「……」

振り向けばコータは苦笑いをして目を反らす。声をかけるが他四

人は反応がない。イラツときて、肩に担いだままのガードレールをその場で旋回して小室の側頭部に打ち付ける。

「ぐああ！……いったあ」

なかなかイイ音が鳴った。その音に他四人も慌てて背筋を伸ばす。まるで曹長殿にしごかれる訓練兵だ。

「――皆、行くぞ」

「は、はい……」

冴子のおおらかな声色に筋肉が弛緩ように弱々しく返事する訓練兵たちを一瞥^{いちべつ}して、俺はゾンビ彷徨^{いちべつ}う商店街を歩き出した。

――

「オンベツブリッジ封鎖できません！」

「コータ、どうした？」

「え？ いえ、何でもないです。ちょっと頭沸きました」

変な奴だ。

俺たちは今御別橋にいる。正確に言うとその一步手前か。橋の通

行は規制され、とんでもない量の人間と車が所狭しとひしめいていた。

「やっぱり交通規制が……」

「ねえ！ あれ、＜奴ら＞よ！」

宮本の指の先には、車の陰で人々を襲うゾンビの姿。小室はそれを確認したとたん飛び出そうとしたが、コータに手を掴まれ振り返る。

「小室、どうする気！？」

「決まってるだろ、助けるんだよ！」

「小室君」

冴子呼び掛けた。まっすぐに目を見て言う様は凛々しさ当社比三割増しだ。

「それが君の答えなのだな」

小室が鋭い目で頷く。

「——ならば私も加勢しよう。もちろん染も、いいな？」

冴子は俺に顔を近付けて微笑み、大人っぽい“艶”を纏う。本当に、こいつは紫色みたいな奴だ。薄ければ清楚に、濃ければ妖艶に分かっててやってるんだから性質が悪い。

俺はため息を一つつき返した。

「……そのためにガードレール引き剥がしたんだろうが」

「そうだったな」

「プツ、慎ましやかな毒島先輩に完全に尻に敷かれてるのね。情けないったらないわ」

ガシッ！

高城の余計な口を黙らせるべく高速のアイアンクローで前頭部を捕らえる。キヤーキヤー喚く高城を助けようと冴子が俺の左手に自分のそれを重ねた。たったそれだけで力を抜いてしまう自分を恨めしく思った。

「高城、私は別に染を尻に敷いているつもりはない。ただ、染が私にどうしようもなく甘いだけなのだ」

高城が全力で首を縦に振るのを確認して冴子は向き直ると、小室に言った。

「分かってくれて嬉しいよ……では、開戦といこうか」

「はい」

俺は冴子を抱え車の上を跳ねながら進む。ガードレールの重量も相まって、踏み付けた車体にはことごとくくつきりとした足跡が残された。

グシャグシャと金属のひしゃげる音が鳴り響く。俺は冴子を持ち上げて掌に乗せると、<奴ら>の群がっている場所目がけて押し出した。

「はっ！」

タイミングを合わせた蹴りで十メートルほど突き進み、空中で上手くバランスをとった冴子は眼前の敵に向かってその手に構える木刀を振り下ろす。頭蓋骨をかち割られた敵がひれ伏すと、続いて俺の持つガードレールが冴子に近寄る<奴ら>を薙ぎ払った。

「らああああ！」

複数体を巻き込んで後方へと吹き飛ばす<奴ら>をよそに、俺はガードレールを構え直す。見れば小室と宮本は無事な人間に寄り付く<奴ら>を殴り倒している。

地面に突っ伏した死体の頭を的確に潰しながら奥へと進み、目についた奴から地獄へ送っていく。大味な俺に対して、冴子はまるで水が流れるような動きで<奴ら>を殲滅する。

「いつ見ても無駄に綺麗だ」

「無駄は余計だ、染」

いや無駄だな。綺麗すぎるんだよ、つい目が行っちゃまうだろうが。

だがそこまでは言ってやらない。そんなこと口に出すタイプじゃねえし。冴子も言外に察しているだろう。その証拠にこれでもかっただけに顔がニヤついている。それでも脱力せず凜とした雰囲気

絶やさないのはこいつ故か。

コータが高城と鞠川を守っているので安心して戦えるが、むしろオートマグが使いたくて仕方ないようにも感じられる。後から後から現れるく奴らゝにガードレールで切り込み数体まとめてお星様にしてやれば、しばらくして派手なスプラッシュが響き渡った。

「マグ、リリース、ロード、エンドファイア！」

コータがノリノリで叫ぶ。ああ、釘切れたのか……。オートマグを抜き放ってく奴らゝの頭に次々にキスマークを張り付けていく。反対側からは脳味噌がぶちまけられた。つかこいつはやっぱトリガーハッピーなのか？ 銃持つと目付き変わるんだが……。

そうこうしている間に時間はすぎ、最後の一体を宮本が突き飛ばしたのを見て冴子が口を開いた。

「橋の上の敵は全て無力化したな」

冴子が木刀を振って血を払い先を見れば、察連中は銃を構え威嚇していた。

「お巡りさんたち、通してくれそうにないわね……く奴らゝをやったのに」

「どちらにせよ、通すつもりはないでしょうね。ここで私たちを通したら他の人間も便乗して詰め掛けるに違いないわ」

鞠川に高城が言い返すのを聞き、小室とコータが唸る。橋の隅に血塗れのガードレールを放り、伸びをして無人の車のボンネットに腰を下ろして空を見上げる。

ふと左腕に温もりを感じたかと思うと、それは自身の頭を俺の肩に預けた。俺は目だけ動かして綺麗な黒髪を視線に捉える。心なしかその光沢は哀愁を孕んでいるように見えた。

「……染」

「なんだ」

「私は今、満たされている……絶対的な敵を討ち果たして、とても充実しているんだ」

「奇遇だな、俺もだ。＜奴ら＞をぶっ飛ばしてるとスカッとする。人間なんかと違って手加減無用だ」

「うむ、武人とは戦ってこそだな」

「違えねえ。銃持つと撃ちたくなるアレ、コータがいい例だ」

安心したのかフツと笑って、冴子はそのまま小室たちの方に歩き出した。俺もそれに倣い、首を鳴らしながら立ち上がって冴子の背中を追う。

すると鞠川が両手を合わせ、いかにも妙案が浮かびましたといった風に言った。

「あのね、先生、今日はもうお休みにした方がいいと思うの！」

想定外の発言に「は？」と聞き返す高城たちに説明する。

「歩いてすぐのところに使えるお部屋があるの。女の子のお友達の部屋！ 後、車も置きっ放しで、おつきくて戦車みたいなのよ！」

あー、確かこんなシーンが原作にあったっけなあ、あんま覚えてねーけど。まあ、基本流れに任せとけば上手くいくだろうさ。それにその内暗くなるし、確実に休める場所があるなら活用すべきだ。

とか考えていると、まず冴子が鞠川に同意した。

「鞠川校医の言う通りだろう。今無理に橋を渡るより、確実に体を休められるならそうすべきだ」

「電気が通ってる内にシャワーだって浴びたいわ」

まさしく俺の考えを代弁した冴子に高城も賛同する。直後高城の胸辺りを眺めていたコータが蹴り飛ばされたが知ったことじゃない。

「孝、どうする？」

「うん。冷静に考えれば静香先生の言うことももっともだし、暗くなってるから宿を探すのは危険すぎる。……泊まるう、今日はみんな疲れてるし」

「そうね」

宮本と小室も賛成。全員一致で鞠川の友人宅に世話になることになった。

俺はトンファ―を抜いて言い放つ。

「んじゃ、また抜き足で歩くか。鞠川、案内頼んだ」

「頼まりました！」

ふわふわと答える鞠川から視線を外し、俺と冴子を先頭に俺たちは歩を進めた。

#08・温もり（前書き）

バリバリ冴子さんの惚気話です。

#08・温もり

初めて彼と話したときは少し気圧されてしまった。何もかも見下したような目で、なんでもないことを聞くのだ――

「毒島冴子ってな前か？」

――と。

私は彼、河陰染にただならぬ雰囲気を感じながらも至極普通に応対した。不思議な印象は翌日明らかになった。河陰染はとんだ不良だったのだ。その時はそれで納得した。

喧嘩で入院したときは見舞いに行つてやった。クラスの皆は彼を怖がつて誰もそんなことはしないから――いや、本当は自分が彼を恐れてなどいないと、臆病者ではないと証明したかったからなのかかもしれない。

話をしてみれば、案外普通の奴だった。それに心なしか、私が来て嬉しそうにしていた、まあ私見だが。それからよく話すようになって、不良と言っても自分より弱い者にだけ大きな顔をするような小物ではなく、ただの喧嘩屋だった。

彼との関係が変化したのは中学二年の頃。強姦魔を叩きのめしたときの快感に恐怖していた私を完敗させ、精神を救ってくれた。あ

の時の言葉は、自身の遙か高みから発せられていたように感じた。

私はどうしようもない臆病者だったのだとようやく気付いた。怖れるまでもないことだったのに。それが許せなくて、幾度となく染に挑みかかった。自分に負けない強さがほしかった。

初めて本当に勝ちたい、今すぐにも超えたい相手を得て、毎日剣を交えた。互いの骨を折ったこともあるし、竹刀は何本折ったか覚えていない。染は太刀筋こそ荒削りだったが自分の身体のスベックを最大限活用することについては天才的で、勝敗は半々だった。戦って戦って、私たちは理解し合っていた。

クラスの男女が思春期ならではのピンク色の話題で盛り上がる中でも、私たちは戦い続けた。染に興味はないのかと聞いたら、

「俺たちの関係はあんなマセガキどもみたいな生温い人肌の温度なのか？」

と返されて、確かに私たちには似合わないと思った。得物を交えてこそその間柄だったから、言うなれば“鉄の焼ける温度”だろうか。彼らのような青臭い関係ではなく、もっと真剣な関係だった。だから染は私の身体を求めなかったし、私も誘ったりはしなかった。

ある意味で染はとても誠実だ。武を探求する者として通すところはちゃんと通すし、認めた相手は尊重する。今は染と私は恋人同士だが、こうした理由から私たちの関係は普通の恋人とは違う。私たちは抱き合い支え合っているのではなく、背中を合わせることで支え合っている。求め合う関係ではない、託^{たく}し合う関係なのだ。

私たちはずっと相棒として側にいた。なんの気がねなく接するこ

とのできる仲。恋愛感情がなかったと言えば嘘になるが、それ以上に戦友としての信頼の方が大きかった。私たちが共にいるのに恋人だなんだという理由は必要なかったから。

それでもきつかけさえあればそういう方向に進展するくらいには、愛し合っていた。

中学三年の秋、大会を共に優勝で終え皆が受験に本腰を入れ出す頃、私は推薦をもらって藤美学園への進学が決まった。不良グループやギャングを狩るのに喧嘩三昧だった染は当然推薦は受けられず、通常受験。

「お前と同じとこで、今までみたいに一緒にやっていきてえんだ」

その言葉に私は勉強を見てやることにした。今思えば、この時にはもうとくに惚れてしまっていたんだと思う。そうでなければ、親のめったに帰ってこない自宅に“住まわせる”ことなどしなかっただろうから。

最初はもちろん反対されたが、彼の实力を見せて私が「世界でもっとも信をおいている人だ」と言ってやれば貞操観念にうるさい父も渋々了承してくれた。かくして学校には内緒で共同生活が始まった。

数ヶ月間一緒に暮らして、その間にいくつかの暴走族が壊滅したもののなんとか試験前夜まで過ちは起こらずにすぎた。

しかし、その日の夜はいつもと一味も二味も違った。

その日は父も交えて夕飯にカツ丼を食べて、翌日の試験のため早

めに就寝した。頬を撫でる月の光が心地よい夜だった。浴衣を着て布団でうとうとしながら意識が完全に闇に墜ちるのを待っていると、部屋の襖がゆつくりと静かに開き畳の床に聞き慣れた足音を鳴らした。

染だ。

私に目がけて一直線に進んでくる足音に、話しかけるタイミングを逃してしまう。仕方ないので狸寝入りを決め込んで、出方を待つ。染に限って襲ってくるというのは考えられないからそのまま眠ってしまってもよかったのだが、私も彼の行動に興味が出てきて起きていることにした。すると染は指通りを確かめるように私の髪を撫で、次第にその指を肌へと移していく。大きな手が頬を包みこむと、唇に温もりを感じた。

まるで信じられないことだった。染にはとても似つかわしくない、いやむしろ行動で示す分染らしいのだろうか。

ゆつくりと離れた唇から甘く上気した息が洩れる。目が合った。とたんに身を退く染の胸ぐらを掴んで仕返ししてやる。今度は舌まて入れる。官能的な水音が月光と混ざり合い静かな夜に“色”を落としていく。お互い染まっていく。

溢れた唾液が顎へと伝うのを手で拭くと、二人して布団に潜り浴衣が乱れるのも気にせずキスを続ける。初めて見る不安そうな染に、私は腕を伸ばしその頭をかき抱いた。言葉もなく、ただ抱き締めた。すべてを預けてくれるまで。

その夜が、私たちが互いを明確に恋人と認めた夜だった。

「そんなことがあったんだあ」

宮本が火照った顔で言った。湯船で暖まった身体は想像以上に口を滑らかにするらしく、染との馴れ初めを二十分くらい延々と語ってしまった。今までしたことなかったガールズトークというものに興奮したのだろうか。あの頃は強くなることしか眼中になかったから、それも仕方ないのかもしれない。

「ただの不良かと思ってたけど、案外純情なのね……」

「先生も初めて聞いたわ！ やっぱり河陰君っていい子なのね！」

染に対する皆の印象も変わったようだ。やはり自分の男を認められるというのは嬉しい。染は喧嘩馬鹿だが、大切なものはとことん大切にする奴だから。私も大切にされているし。

「あの戦車男も彼女の前では弱みを見せることもあるわけね」

高城が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。聞いてやったぞと言わんばかりの態度が可愛らしい。

「男とはそういう生き物だよ。自分の女にいいところを見せたい反面、弱みを唯一打ち明けられる。虚勢を張って生きるのが男、女はそんな男を陰で支える。前時代的と言えばそれまでだが、少なくとも

も私と染はそうやって互いの誇りを守っている」

「うわー、すごい惚気のろけ……」

目を細めながら冷やかしてくる宮本に苦笑しながら頭を撫でてやる。そうすると宮本は赤くなってうつむいてしまった。

鞠川校医が呟く。

「その内指輪を渡されてプロポーズとかあったりして……」

どうだろう、染がそんなことするだろうか……。物で絆を確かめるようなメルヘンなのは、とてもじゃないが似合わない。

「染は物神崇拜フェティシズムを嫌うから、『希少金属の輪つかごときで俺たちの絆は表せない』なんて言って指輪を送ったりはしないだろう……。それに、今でも十分夫婦らしいよ。戦友も恋人も夫婦も建前でしかない。あらゆる意味で相棒なんだ、私と染は」

そう返すと鞠川校医と高城は「ふーん」と物珍しそうな目で見てくる。しかしそれに反して宮本は口をつぐんだ。

そう言えばこの娘は学校で恋人を亡くしたんだっただか……。不謹慎だったと反省しつつ、うなじに手を添えて引き寄せた。

「えっ、あ、あの……！」

「私が言えた義理ではないが……無理しなくていい……」

綺麗な髪を指で梳すいて抱き締めてやる。かつて私が染にしたよう

に。そして間もなく静かに啜り泣く声がバスルームに響いた。

「ありがとう……」

「うむ」

ひとしきり泣いて落ち着くと、私の胸を離れて腫れぼったい目を拭う。宮本はそのまま湯船に鼻まで浸かってブクブクと泡をたてた。

「フフ……。じゃあ、そろそろ上がろうか」

私はバスタブを上がると、まだ赤いままの宮本と共にタオルを巻いてバスルームを出た。

#09・救出 誘拐

愛用のトンファー、ボーンクラッシャーを磨く。角のところは度重なる酷使に塗料と被膜が剥げてしまっているが、性能に支障はない。しかし血みどろになった得物を水洗いしただけではいろいろと後味が悪い。

男衆で一番風呂をもらい、入れ代わりで冴子たちが入った。今頃俺に無断で冴子が馴れ初め話でも始めているだろう。そして俺たちは二階で見張り中というわけだ。

小室とコータは銃の整備やら弾籠めと忙しそうだ。さっき二人がバールでロッカーを開けようとしていたのを片手で開けてやったのだが、あまり驚かれなかった。バス投げ飛ばした後じゃあさすがに慣れるかもだが。午後六時、斜陽のさす中小室が口を開く。

「ところで河陰先輩、どうしてその、服を二重に着てるんですか？」

服、学ランの下に着ていたものだが、ファスナーの付いたタートルネックのスポーツウェアに頑丈な素材のアーミーパンツだ。上は赤、下はカーキ。原作開始が分かったから靴はトレッキングシューズを履いてきている。去年の夏、冴子と登山（という名の山籠り）をしたときに買ったものだ。まともなデートをした記憶がないのは気のせいだと思いたい。ちなみに学ランはもう捨てた、動きにくいから。

「チンピラどもにはナイフ振り回す奴も多いからな、足回りの防御用だ。後は、動きやすくするためだろうな」

そう言つて俺はトンファアを腰に巻いている幅広のバンドのホルダーに挿す。

「小室、今の内に銃の扱い方を覚えておけよ。お前、狙ったことないだろ」

「当たり前ですよ。でも僕が使つより先輩や平野の方が……」

「馬鹿鹿、俺には銃より使える得物があんだよ。お前にはまともに使えるもんなんてねーんだから、せめてなんでもそれなりに使えるようにしとけ」

ショットガンにシエルを装填し指先で回して構え、小室の額に突き付けた。トリガーに指を掛けながら少し小突くと血の気が引いていく。平野が慌てて小室を突き飛ばす。銃の方に触れないのは万一にも暴発を防ぐためだ。

「河陰先輩、悪ふざけがすぎますよっ！ 小室も真面目に覚えて、ショットガンなら頭を狙えばいたい当たるから！」

「あ、ああ……」

「こいつの細腕じゃ反動を押さえきれねえだろ。片手で折り砕く自信があるぜ」

するとコータが少し考えて、「じゃあ」と提案した。

「……小室、首元か胸を狙うんだ。そうすれば丁度頭の位置に当たるはずだ。でも射撃毎に狙いを修正するのも必要だよ」

「撃ち方は分かったけど、それまでは？」

「そうだね。えっと、まずは弾を籠める。必ずポケットから一発ずつ装填するんだ。ショットシエルは口径が大きいから、一度に何発も掴むと手が滑りやすい」

コータは順調に説明していく。ポンプアクションがどうか、余弾は必ず数えろとか、構え方や、反動で跳ねたスコープで目を怪我しないようにとかいろいろだ。

「ていうか平野、なんでそんなに詳しいんだよ。エアソフトガンで練習したのか？」

小室の何気ない質問にコータの目が光る。

「まさか、実銃だよ実銃……！」

「マジかよ！ お前と言い先輩と言い、何やってんだ！？」

「アメリカに行ったときに民間軍事会社、ブラックウォーターに勤めていたインストラクターに一ヶ月教えてもらったんだ！ 元デルタフォースの曹長だよお！」

デルタって言や米軍の特殊部隊だったっけか？ あんま覚えてないけど。ワイワイ騒いでいるところを抜け出し、俺は一階へ下りていった。

キッチンにある冷蔵庫を漁る。喉が渴いて仕方なかったのだ。

「あつたあつた」

冷蔵庫から取り出したのは――

「この身体で酔うなんて考えられないよな……」

――缶ビール。

二本ばかり失敬してリビングに出る。

「染……」

「……冴子、お前なんつーカッコしてんだ……」

そこには丁度今あがったのだろう、裸エプロン姿の冴子がいた。しつとりと水気を含んだ髪が色香を放ち、艶やかさを底上げしている。脅威的な支援火力が理性を制圧（性圧？）してくる。傍らに控えた宮本が霞んで見える。

「ああこれか、サイズの合うものがなくてな。仕方なく……」

そう言つて冴子はエプロンを引っ張つてみせる。指を放すと布地の弾性力で豊かな双丘が跳ねる。見ていられなくなって、俺は両手を突き出した。

「えっ？」

「……持つてろ」

両手をふさいでいた缶ビールを冴子に預け、俺はトップスを脱ぎ目の前にかざす。「これでも着とけ」と長袖のそれを渡すと、冴子は缶ビールをよこして小さく頬を染めて言った。

「汗をかいてしまつかも……」

「構うかよ」

「そうか……ありがとう、染。……酒盛りもほどぼにな」

そのまま奥の部屋へと進んでいく冴子の背中に一抱きくらいしておくべきだったと後悔しながら、居心地悪そうにしている宮本に話しかける。

「どうした？」

「いや……冴子さんに河陰先輩のこといろいろ聞いて、少しイメーシ変わったから」

あー、やっぱあいつ話しやがったのか……。まあ、あいつなりに俺のこと考えた結果なんだろうが、なんかむず痒いな。

「上がったあ！」

「ちょっと、服着なさいよ！」

鞠川と高城が騒がしく脱衣室から出てくる——って、鞠川はタオル一枚じゃねーか！ 冴子以外には興味ないが。

「ああー！ 河陰君、未成年の飲酒は犯罪よ！ その缶ビールを渡しなさい！」

「あんた風呂上がりの一杯やりたいだけだろーが。つーか今になって法もクソもあつたもんじゃねーし」

と言いつつも片方を鞠川に投げ渡す。すると鞠川は持ち前のドジっ娘属性が発動したのか取りこぼして尻餅をついてしまった。その拍子に身を覆っていた一重のタオルがはだけ、絹のような白い肌が外気に触れ——って冷静に実況してる場合じゃねー！

「きゃああああー!?」

「どうしたんですか、静香先生!?!」

「大丈夫ですか!」

二階からコートと小室が……。

ブーーーーーッ!

二人とも○・二秒で鼻血噴いて倒れちまった。俺は……まあ、冴子の肌を見たことないわけでもないし、なんとか耐えた。冴子以外には興味ないんだよ！ 本当だ！

理性との相談の末懸命に後ろを向き、目を開ける。

「染、説明してくれるな？ それとそこな二人はく奴ら>にはならないよな？」

血みどろのコータたちを一瞥し、いかにも「私は君の味方だよ。だからさっさと真実を吐け」と言った風な笑み（凄み）を浮かべて俺を見つめる冴子がいた。取り敢えずぶかぶかのスポーツウェアで指が隠れ、とても可愛らしかったとだけ言っておこう。あくまで首から下の話だが。

冴子に事情を説明した後、夕飯ということになったのだが、誰か一人は見張りを継続すべきだとの言により俺が二階に上がることになった。大勢で食卓囲むなんて柄じゃねえし。冴子には先に食べておくよう告げている、万一の事態でも片方の腹が満たされていれば戦えるからだ。

双眼鏡を覗き辺りを見回す。相変わらずく奴らゝはそこら中で人を食い荒らし仲間を増やしているが、ここはまだ安全らしい。念のため灯りは消しておく。

しばらくして、レンズの向こうに見覚えのある光景が映し出された。

「ありゃあ、もしかして……」

小さな少女を連れていた中年の男が、同じ人間に腹を刺されて倒れこむ。おいおいまさか……いくらなんでも早くねーか？ まだ八

時にもなつてないぞ。

だが目の前で起こっていることに変わりはない。として、どうする……？

「今さら助けてどーなる、所詮穀潰しだろーが……！」

名前もとうに忘れたその少女が自らの父親にすがり付いて泣いている。俺の“時”には涙なんて出なかったのにな、よく泣けるものだ……。鳴き声を聞き付けてく奴ら>が迫る。徐々に門に近付いていく。今ならまだ間に合う。

握り締めた手摺りに手形が付くのを感じながら、頭からどうしても親父の死んだときのお袋の姿が離れなかった。

「クソッ！」

俺は考えるのも嫌になって、飲んでいたビールの缶を握り潰すと“原作”と言い訳しながら飛び降りた。

ショットガン片手に門を飛び越えく奴ら>の頭を踏み付け足場としながら塀に登る。平和島流パルクルで死人のはびこる中その少女の下へと向かった。俺の百メートルのタイムは、本気を出せば六秒の壁すら破る。瞬く間に塀を飛んで目的へと到達した。大ジャンプで少女の眼前に降り立ち、抜き放ったトンファーを振るいく奴ら>を文字通りぶっ飛ばした。

「ふえ……お兄ちゃん？」

「来やがれ！」

トンファーをしまい少女の腰を人さらいのように抱え上げると、俺は再び堀へと戻り来た道を逆走していく。人海のごとく押し寄せるく奴ら>を全滅させようと思えばできたかもしれないが、片手のふさがった状態では不利だ。俺はショットガンを構えると、堀に手を掛けようとするく奴ら>に向かって引き金を引いた。凄まじい反動を左手一本で押さえ付けながら敵を吹き飛ばす。ドミノ倒しに崩れていくく奴ら>を尻目に、スライドを口でくわえてリロードする。次弾の装填が完了したそれを再び構えてぶっ放した。

断続的な銃声が聞こえる。外で誰かがく奴ら>相手にドンパチでもしているのだろうが、そんなに音を響かせては撃退するどころかむしろ引き付けるだけだ。

かなり近いが、数発撃ったところで銃声が止んだ。蓮根を摘みながら平野君が呟く。

「やられちゃいましたかね、外の人……」

その言葉に小室君が眉をひそめる。やはり私や染と違い彼にはまだこの状況を割り切ることはいらないらしい。私は向き直って言った。

「この状況下では誰もが死に瀕している。そういちいち思い詰めて

いては保たないぞ」

「分かってます……でもどうしても割り切れないんです。どうして先輩たちはそんなに普通でいられるんですか？」

そうか、君には私たちの精神状態が平常に見えるか……。あるいはそうかもしれないな。

「私たちは平常心でなどいないよ。＜奴ら＞を見たときから、血が騒いで仕方ないんだ。染と私は武人だからな、＜奴ら＞の存在には“むしろ望むべき”という部分すらある」

「そんなのって……」

「画家は絵を描くことに、歌手は歌を歌うことに充実感を覚える。自然なことだ。ならば武人が敵を討つことに充実感を覚えるのも、また自然なことだとは思わないかね？」

私が言い終わると、小室君はそのまま黙ってしまった。正論をぶつけてみたが、少し大人気なかったかもしれないな。ただでさえ多感な年頃なのだし、染と私は早熟な分配慮すべきだったか。

「君の気持ちも分かるよ。最優先事項が自分の命であることだけ忘れなければ、今はそれでいい」

「は、はい……」

ドンドンッ

小室君が返事をした直後、玄関から音がした。ノックにしてはい

ささか荒っぽい。食卓に一気に緊張が走り、すかさず私は立て掛けた木刀の柄を掴んだ。＜奴ら＞だろうか、しかし門は閉まっているし何より染が見張っている。では他の生存者が明かりを見つけて来たのか。平野君が二階に駆け上がり、私は小室君と宮本を伴って玄関に向かう。高城はインターホンを確認しにいく。それぞれが迅速に対応する中、鞠川校医は酔っているのか椅子から立ち上がると同時に転けていた。

いち早く辿り着いた私は外の状況を確認なるべくドアに耳を押し当てた。

「おおい、冴子！　ここを開ける！」

「……は？」

ドアの向こうから聞こえてきたのは他ならぬ染の声だった。見張りが何をやっているのだ！

緊張がほぐれ、皆の精神が萎えていく。ご指名の客に私は玄関に向かい緩慢な動作でドアノブを回す。

「まったく、君は見張りだろうに……」

開け放った先には、長方形に切り取られた夜の中染が左に銃を持ち右に潤んだ目の可愛らしい少女を抱え――

「――さらってきたのか……」

「どう見たらそうなるんだ……？」

眉間に皺を寄せ凄みを利かせて返してくるものの、はつきり言うて可愛い。あくまで私の視点だが。

可愛いので意趣返しもかねて、もう少しだけからかってみることにする。頬を染め、胸に手をあてながら上目遣いで言っただけ。

「さうらうほど子供がほしいのなら、私が産んでやるのに……」

「それはすべて終わってからだ。……とにかく入れろ、説明はそれからする」

「あ、ああ……済まない」

私は染と少女を中に通す。奥で皆が驚きの声を上げているが、染の返した言葉にしばらく私はそこから動けなかった。

「今の……プロポーズか……？」

私の声は誰にも聞かれぬまま、夜闇に消えていったのだった。

#10・地獄の中の光（前書き）

P V 2 6 7 5 9 5、ユニーク4 3 3 5 1、お気に入り6 4 5。
感動でつ（、；ω；、）

小室氏と麗の濡れシーンはアリスが来たことで先延ばしに……。

#10・地獄の中の光

「お名前は？」

「希里ありす、七歳です！」

鞠川の問いにチビジャリがハキハキと答える。父親の死に目に会った直後で健気なもんだ、同情はしないが。にしても、こんなガキ助けちまうなんて、俺も案外過去を引きずってるらしい。まったく馬鹿馬鹿しい話だ。

小室と宮本がチビジャリを慰めると、徐々にチビジャリの目に涙が溜まっていく。決壊して泣き始めると、宮本が頭を撫でながら抱きしめた。小室は視線を宮本の方に固定したまま口を開く。

「でも、河陰先輩が人助けなんて正直意外でした」

「酔ってただけだ」

「戦車男にも人としての真心がまだ残ってたのね」

「ほう……高城、そいつアまるで俺が冴子のことを愛していないように聞こえるんだが……肅正してやろうか？」

そう言っただけ俺は腰に挿したトンファーに手をかける。高城が「い

いからさつさと食べちゃいなさいよ！」と俺の目の前に広げられた料理を指差してまくし立てた。手に持った箸が軋むが冴子の手料理なので黙って食す。うまい。いつも通りの味に、“日常”を思い出した。

ふと意識中に燦^{すぐ}る違和感に眉をひそめる。いつもと違う、冴子が感想を聞いてこないのだ。皿洗い中とは言え意図して俺と距離を置いているようにも見えなくもない。シンクに向かって手際よく皿を洗う冴子は、心なしか目も虚ろで上の空だった。

「あ、あの……お兄ちゃん」

「アア？」

突然話し掛けてきたチビジャリに生返事を返す。ちなみにこのチビジャリの目の前にもまた、冴子の手料理が分けられている。泣き腫らした視線が俺に注がれる中、俺は蓮根を摘んだ。

「……助けてくれて、ありがとうございました」

「単なる気紛れだ」

「それでも、ありがとうございました」

「……」

俺が冴子を見ている間に宮本が言い含めたのか、チビジャリの口から出てきた言葉は感謝の言だった。俺は興味が失せて料理を掻き込む。すると視界の端にキッチンから戻ってくる冴子が見えた。

冴子はうつむき加減で言い放つ。

「済まない、少し疲れているようだから休むよ」

そして二階へと上がっていく。女は一階で寝ることになってたから、その行動は明らかにおかしい。どうやら“さっきのこと”を気にしているらしかった。つくづく可愛い奴だ。俺は料理を平らげると席から立ち上がった。

「後はテキトーに話し付けといてくれ」

「何しにいくの？」

やや酒が入ってか、空気の読めない鞠川が聞いてくる。

「アア？ 見張りだ見張り」

苦しい言い訳をしつつ螺旋階段を登っていく。自分の足音がやけに耳に付いた。

電灯は消され月明かりのみが照らす部屋の中、ダブルベッドに腰掛け赤黒いトップスから伸びたしなやかな二脚を青白く光らせている。流れる水のように流麗なその二振りは、刀の波紋を思わせた。

気配に気付いてうつむいていた顔をはっと上げるが、俺の姿を認

めるとすぐに視線を反らした。

「あの……だな、その……染？」

自分の中で收拾の付かなくなった思考をなんとか言葉に纏めようと右往左往する冴子の前に立ちはだかり、ときどき前髪の隙間から覗く熱っぽい瞳を真っ直ぐに見つめる。

どもるのは冴子らしくないと、俺はすぐさまその身体を押し倒した。肩を抱く両の腕かいなに力を込める。

「せ、染!？」

「つたく、今さらだろーが」

心の内を戦いの中に理解仕合ってきた俺たちにとって、言葉は記号にすぎない。千の言葉を連ねずとも、剣の一打ちで多くを察する。それほどまでに俺たちは深く結び付いている。なればこそ、伴侶として互いを認識するのも必然だというのに。

「分かっている、分かっているのだ……ただ、言葉は軽かれど愛の前に信をおく私たちには決定的だろう？ 確信はあったが、無粋なまでに実感したのはこれが初めてだからな……」

抱き合ったまま横になり、目を合わせる。潤んだ目たくいが月光を反射して艶やか極まりない。これは官能的とかそういう類たぐいかもしれない。

冴子は俺が貸したスポーツウェアのファスナーをゆっくりと下ろしていく。白磁の肌があらわになると、俺の頭をその胸に掻き抱いた。柔らかな感触が頬を撫で、石鹸の香りが鼻をくすぐる。得体の

知れない安心感が俺を包む……平たく言えばとても心地よかった。

「……なあ染、私は気付いたんだ。この二日足らずに、私たちはかつてない頻度で唇を交わしている。そして思った、私たちは無意識に不安を感じているんだと。分かるだろう？……だから染、さっきのやり取りが本気なら——」

心中で同意する中、冴子はそこで区切ると爆弾を――

「――私を抱いてくれ」

――投下した。

ブーーーーッ！

ベランダの方から何やら謎の噴射音が聞こえた気がしたが気にしないでおく。同時に一階にミリオタの後輩の姿を見なかった記憶がよぎるが、それも頭の隅に追いやる。

しばらく固まっちゃったが、ようやく冷静さを取り戻すと俺は眉間の皺を一本増しにして返答した。

「……冴子、お前の言ってることは的を射てるし、はっきり言ってる俺もお前に欲情してる。今すぐにも喘がしてやりてえよ。……だがなア、それとこれとは違う。ましてや安心したいって理由ならなおさら抱けねえ。本当に安心しちまったら精神が緩むし、もしそれでお前が噛まれたら、俺は後を追っぜ？」

冴子はいきなりの俺の宣言が信じられないのか目を大きく開けて口をパクパクと動かしている。

「そんな、後を追うだなんて許さんぞ！ 第一それを禁じたのは染、君自身ではないか！」

「嫌ならそういう動機で求めんなよ。それ以外ならちゃんと俺の手でけじめは付けてやるさ。死にも、愛にも」

「む……ならせめて“抱かせて”くれ」

冴子は俺の後頭部に回した腕の力を強める。分かってる、冴子が言ったのはつまり添い寝の誘いだ。ならば断る理由はない。たまに寮に招いて二人添い寝することもしばしばあったしな。

「好きにしろ。」

俺は目をつぶり身を委ねる。だが意識が落ちる前に、一言だけ呟いた。

「……すべての終わりがいつ来るのか、まして本当に終わりなんてもんがあるのかも分からねえ。でもいつか、必ず……」

「ああ……」

そして俺たちの意識は絡み合い、まどろみの先へと落ちていった。

「帰って来ないな、二人とも」

河陰先輩とアリスの食器を片付けながら僕は呟いた。そのまま寝てしまったのだろうか？ 別にいいのだが、それはそれで困る。僕と平野はいつたどこで寝ればいいのか。床は嫌だなあと考えていると、高城が呆れたように言い放った。

「どうせあの二人のことだから、最後まで行かないにしても乳繰り合ってるんじゃないの？ それを平野が覗いて……ってあの出歯亀デブ！」

高城は勝手に自己完結して二階に上がっていつてしまった。いつの間にか静香先生も酔って寝てしまって、ついには僕と麗、アリスだけになった。

「僕は、河陰先輩がありすを助けたのはいいことだと思う」

僕が言つと麗はきょんとしてこっちを向き、ありすは傍らで僕の顔を見上げながら首を傾げた。

「当たり前じゃない。それにもともとそういうスタンスだったし。何より小さな女の子が殺されるのを、黙って見てられないでしょ」

「ああ、先輩を少し見なおしたよ。それに、僕らなら銃をバカスカ撃って今頃ここにはいれなかっただろうし……」

「それもそうね」

「ねーねー、なんのお話してるの……？」

アリスが僕のTシャツの裾を引っ張る。頬を膨らませて睨むさまはとても可愛らしかった。僕はしゃがんで目線を揃えると、柔らかな髪をなびかせるその頭を撫でた。

「アリスが無事でよかったって話だよ」

「……ホント？　ありす、じゃまじゃない？」

「何言ってるの、邪魔なわけないじゃない。あなたがいるだけで、戦う理由になる……アタシたちがまだ人間だっていう証なんだから」

麗はアリスに笑顔を向け、優しい言葉をかける。アリスは麗に飛び付いて、「でも……」と震える声で言った。

「ありす、なんにもできないよ……ママはどこにいるかわかんないし、パパがしんじやったのも、きっとありすが……」

「それは違うつっ！」

アリスが言い切る前に、僕はとっさに叫んだ。子ども相手に大人気ないと囁く自分がいたけど、どうしても認められなかった。ここでこの娘の自虐を聞き流したら、娘を守るために命をかけてそして死んだ彼女の父親に申し訳が立たなかったから。

「君のパパは、体を張って君を守ろうとした……立派なパパだ。その行為を否定するようなこと、言っちゃいけない」

「お兄ちゃん……」

アリスは涙で濡れた目を瞬きながら僕の方に振り向く。僕は視線

を強めてその瞳を見つめた。

「自分の親を悪く言っちゃダメだよ」

「……うん」

アリスの返事を聞くと僕は立ち上がり、二人に背を向けた。後ろから麗が声をかけてくる。

「孝も言つときは言つのね」

「そりゃ言つさ」

短く返して――

「――僕は早めに寝るよ。平野と見張りをシフトしないとしないし。麗はアリスを風呂に入れてあげてくれ」

「ええ、分かったわ」

僕は寢床を確保すべく動きだした。

世界が破滅へと踏み出して二回目の朝、俺は冴子の胸の中で目を覚ました。昨日は互いにのぼせてたのか、改めて考えてみるとかな

り羞恥をさそう格好だ。ファスナーが下ろされ、生の乳に埋もれているのだから。男の幸せを感じなかったと言えは嘘になるう。ベランダから覗く太陽がいつもより若干高い位置にあるのも、このけしからん乳のせいに違いない。

「おはよう、染」そして“おはようのキス”をねだるこいつは俺の寝顔を見てにやけていたのだろうな。俺は短く唇を冴子のそれに重ねると、冴子の着ているトップスのファスナーを上げてやった。

「よく眠れたようだな」

「よく眠れすぎだ」

「素直に心地よかったと言えばいいのに」

小悪魔的に笑う冴子に眠くならない程度に再びキスをする。冴子はずっと俺に寄り掛かってくる。俺は冴子を横抱きにするとベッドから引き上げ、床に立たせた。

「行くぞ、腹が減った」

「早起きできれば私が作ったのだが……」

「構やしねーよ」

俺が寝過ごしたのが悪いというのに、相変わらず冴子は謙虚に自分の非として姿勢を低くする。まあ半分はそうかもしれないが……。

冴子を隣に螺旋階段を下りる。どうやら俺たちで最後らしく、全員が食卓についていた。すると突然テレビジャリが椅子を下り、てく

てくと俺の前まで歩いてくる。そして俺の眠気を吹っ飛ばす肩書きで呼んできた。

「……パパ」

「誰がパパだガキ……」

寝起きの頭に一気に血が上り、意識が覚醒していく。十分な思考力を発揮できる状態まで回転が加速すると、俺の目が悪戯の主犯を探す。

「お前の父親は死んだ」

「うう、はい……でもそう呼びなさいって、お姉ちゃんたちが……」

俺は高城と宮本にガンを飛ばす。口に手を当てて笑いを堪える二人を睨み付けながら、俺の手がトンファーに触れる。すると宮本が言った。

「助けた責任があるでしょ？」

「……状況が同じなら、お前らも同じことをしたはずだ」

ニヤニヤと気持ちの悪い目付きで言う宮本に返す。続いて口を開く高城。

「そうね……でも実際に“保護”したのはあんたよ、“保護者”の河陰パパさん」

ブチィ！

「生言ってんじゃねえぞゴラッ！」

「まあまあ抑えろ、染」

二人の勝手にキレる俺、そしてそんな俺を後ろから羽交い締めにする冴子。若干冴子は嬉しそうだ。

「いいじゃないか、私たちが親代わりをすれば。それに、私を母親にしてくれるのだろう？」

徐々に筋肉が弛緩していく、おいどうした俺の筋肉っ。力が弱まるとすかさず冴子は俺の前に躍り出て、胸板に頬を擦り寄せながら上目遣いでねだる。

「それとこれとはまったく別——」

「染っ！ 一姫だ。最初は女の子から育てるのが都合がいいと聞く。君の手を必要以上に煩わせたりはしないよ、だから少し早めに母親にしてくれ。それとも私だけ母親になろうか？」

グサッ！

くっ、これは……なんもん許せるかつ！ それじゃまるで俺が冴子の再婚相手みてーじゃねえか！

「それは駄目だ、気分が悪い」

「なら………！」

冴子が期待の眼差しで俺を見上げてくる。そんなキラキラした目で俺を見るな、俺は恍惚とした狂気の目の方が好きなんだよ。なんつーかときどき自分が物凄く都合のいい男のような気がしてならん。実際そうなんだろうが、冴子は普段は謙虚だし気配りもできるいい女なわけで、いざねだられると首を横に振れないのは仕方ないことだろう。加えて俺たちの恋愛は信賴に端を発している。本気の願いなら理由いかに関わらず、断ることは自分自身が許せないのだ。

だから、結局俺はこう答えるしかなかった――

「――お守りはしねーぞ……」

「分かっているよ」

冴子は満遍の笑みを浮かべてキスをしてきた。小さくリップ音を響かせながら離れると、俺はさっさと椅子に座った。

チビジャリ……アリスが戸惑った風に冴子に聞く。

「……ママ？」

「うむ、今日から私たちが代わりのパパとママだ」

「でも、パパこわいよ……？」

「早速怖がられてるわね」

茶々をいれる高城に「うつせーよ」と返す。冴子はアリスの頭を撫でて諭した。

「フフツ……アリス、パパは少し恥ずかしがっているだけだ。怖そうに見えても、本当は優しい人なんだよ。実際、アリスを助けてくれただろう？」

ちよつと待て。俺が恥ずかしがっているってどういう意味だ、俺は単にガキが嫌いなだけだ。

「……うんつ。ありす、パパとも仲良くする！」

純粋なアリスは冴子の口車にまんまと乗ってしまい、俺は晴れて養父となったのだった。畜生……！

ちなみに隅で笑いを堪えていた男二人は後で締めることになった。

10 ・地獄の中の光（後書き）

アリ……なのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1060n/>

学園黙示録～戦車男～

2010年10月9日10時52分発行